

北京オリンピック テレビ実況は金メダル獲得をどう伝えたか

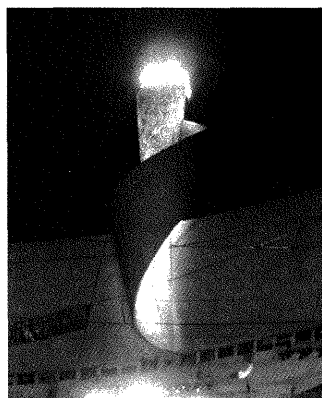
山内 亨

How did the commentators tell the gold medal acquisition in the Beijing Olympics
YAMANOUCHI Tohru

Summer of 2008, the opening for the Beijing Olympics.
How did the commentators tell the moments of the acquisition of the nine gold medals for Japan? And what they wanted to express with their words? In this television broadcast, the topic of "Family" appeared so many times. The messages of an epoch reported by the television broadcasting of the Beijing Olympics are revised.

Key words : beijing olympics television broadcast comments commentators athletes family
times consciousness

I. はじめに



北京オリンピック聖火

2008年夏・北京オリンピック。大会前に多くの環境問題、政治問題が露呈し不安視されたオリンピックだったが開会してみると中国政府の成功に向けた取り組みで大きな混乱も無く、各

競技に好記録と感動を残し終了した。

競技の様子は衛星中継で全世界に配信されスポーツの素晴らしさを届けた。日本も予想よりメダル数は少なかったものの9つの金メダルを獲得し競技関係者ならびにスポーツファンを満足させた。

特に今回は開催地・北京と日本の時差がマイ

ナス1時間。あたかも日本で行われている大会のように競技場の興奮を時間的なストレスを感じることなくテレビ中継で味わうことが出来た。それだけにテレビ実況が伝えた内容・方向性のインパクトは大きかったはずである。

北京オリンピックでテレビ実況は金メダル獲得の瞬間をどう伝えたか。オリンピック中継はベースが国際信号（国際映像）のためユニカメラによる味付けはあるものの映像から受ける印象、意図は平均的である。国内放送のように意図する映像を十分に自由に表現できたとは言えない。そこで今回は映像ではなく実況コメントに注目して日本が獲得した9つの金メダルの瞬間をどう伝え、その意味する方向はどこを向いていたか検証してみたい。

1. オリンピック競技を伝えた実況に時代意識はあるか

実況のあり方・表現に時代の反映はあるのか。オリンピック競技が生で伝えられ日本国民の関

心を集めたのは1936年のドイツ・ベルリンオリンピック女子200メートル平泳ぎ決勝であろう。このオリンピックからテレビ放送が行われたが主役はまだラジオ。よく聞き取れない内容ながら日本国民は耳をそばだて興奮したと記録にある。「前畑がんばれ！」実況である。 ラ

ジオとテレビの実況には違いがあるがそれでもスポーツ実況の原点と言ってよいほど勝負の興奮と日本選手への期待、更に日の丸への過剰な意味合いが伝わってくる。NHKの資料から実況を文字に起こしたものをまず見てみよう。

ベルリンオリンピック女子二百平水泳決勝実況放送

河西三省

今ターンしました、一と掻き僅かにリード、前畑がんばれ！前畑がんばれ！がんばれ！がんばれ！あと四〇、あと四〇、あと四〇、あと四〇、前畑リード、前畑リード、ゲネンゲルも出て居ります、ほんの僅か、ほんの僅かにリード、前畑僅かにリード、がんばれ！前畑がんばれ！がんばれ！がんばれ！あと二五、あと二五、あと二五、僅かにリード、僅かにリード、僅かにリード、前畑！前畑がんばれ！がんばれ！がんばれ！ゲネンゲルも出て居ります、がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！前畑、前畑リード、前畑リード、前畑リードして居ります、前畑リード、前畑がんばれ！前畑がんばれ、リード、リード、あと五米、あと五米、あと四米、三米、二米、あッ、前畑リード、勝った！勝った！勝った、勝った！勝った！勝った！前畑勝った！勝った！勝った！勝った！勝った！勝った！前畑勝った！前畑勝った！前畑勝った！前畑勝ちました、前畑勝ちました、前畑勝ちました、前畑の優勝です、前畑の優勝です、ほんの僅か、ほんの僅かでありましたが、前畑優勝、前畑日章旗を揚げました、前畑さんありがとう！ありがとう！優勝しました、女子競泳で初めて大日章旗が揚がるのです。

今、前畑さんはプールで二着になったゲネンゲル嬢とニッコリ笑って握手して居ります、笑って喜んで居ます

(日本放送協会編「放送」昭和11年9月号、第6巻・第9号)

2. 70年前の時代背景と実況

この「前畑がんばれ！」の実況は過去に「政治とメディア」の関係など多方面で紹介されているので、ここでは多くを述べない。言える事はベルリンオリンピックがナチスドイツの国威発揚に利用され、初のテレビ実況も行われるなどメディアを通しスポーツを伝える画期的なオリンピックになったと言われていることである。

日本も満州・中国戦線に火種を抱え、国家一丸が叫ばれていた折でもある。この年に締結された日独防共協定、4年後1940年の日独伊三国軍事同盟締結と進む中、国民の国家意識の涵養と国威発揚が必要であった。ラジオ中継は過度の「がんばれ！」という期待を込めた実況。「勝った！勝った！」と勝利に対する異常な連呼による興奮と喜びは前畑を通し日本の力が

世界に証明された喜びの表現であり当時の日本の状況からは、ごく自然な成り行きであろう。優勝が国家のためであり、日章旗が掲げられるさまを優勝に貢献した「前畑さんありがとう」というフレーズで締めくくる。その後には相手選手と前畑の表情を伝える実況が続くところなどアナウンサーが意識したかどうかは別にして時代意識そのものであったと言われればうなずかざるを得ない。

今から70数年前の実況。アナウンサーの実況といえども時代が醸し出す意識がコメントに反映されていたということであろう。

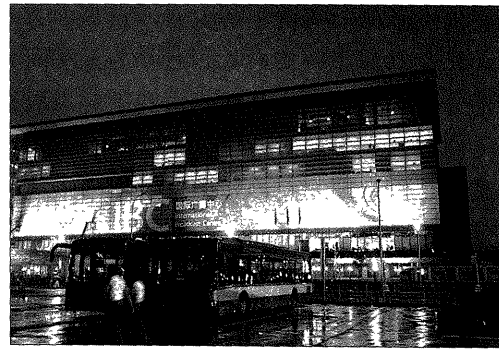
3. 北京オリンピック実況の背景整理

では北京オリンピックで実況・解説者の表現から今日のどんな時代意識が読み取れるのか。

作業に入る前に実況・解説者がどんな状況・体制でマイクに向かっていたか。どんな打ち合わせとどんな縛りがあったか確認しておこう。

北京から日本に送るオリンピック競技映像はI O Cで制作する国際信号をベースに各国が必要なユニカメラと実況・解説者を準備し、それをミックスしそれぞれの国に向け送る。日本はジャパンコンソーシアム（J C）と呼ばれるNHKと民間放送連盟加盟社の合同チームを作り競技場の中継車もしくはIBC（国際放送センター）で映像とコメントをミックスし日本向け放送を制作していた。スタッフはNHKと民放各社から派遣された155人。内訳はテレビアナウンサー20人、ラジオアナ（ディレクター兼務）8人、テレビディレクター31人、テレビ技術58人、ラジオ技術5人 通訳19人（現地スタッフ含む） 残りは事務局（団長等）や事務スタッフであった。

日本と違う映像制作意図（カメラワーク）、コンテンツ構成の仕方に戸惑ったアナウンサーもいたということである。



北京IBC（国際放送センター）
仙台大学勝田教授提供

主な競技の国際信号制作

- 水泳・シンクロ：オーストラリア
- レスリング：ポーランド
- 陸上：フィンランド＋スエーデン
- バドミントン：中国
- 野球：キューバ
- フェンシング：ハンガリー
- ソフトボール：韓国
- 卓球：中国
- マラソン：ベルギー
- 日本は、柔道&テコンドー：フジテレビ
体操：NHKの2競技だけ。

参考までに日本のユニカメラの台数も合わせて記録しておく。陸上（開閉式も）4台、水泳2台、野球2台、柔道2台、レスリング2台、マラソン2台。基本構成は、試合映像や選手抜きをできるポジションに1台とミックスプーン（選手が退場していく所）に1台であった。

実際の制作はNHK・民放のスタッフとも必ずしも自分が所属する局で放送するとは限らないため、突出した色のついた表現ではなく平均的なものを期待されていた。また各競技実況・解説者共複数の種目を抱え、取材・整理に追われ実況当日も内容の細かな打ち合わせは不可能であったと言う。競技の始まる前やIBC（国際放送センター）で顔を合わせた時に短い打ち合わせをするのがやっとなりで、打ち合わせも無く中継に入るケースもあったという。そんな中でどんな時代意識が反映されたか。

II. 検証方法

言語・語彙の比較検討の問題

金メダル獲得シーンで実況・解説者が使った言葉の解析作業に入るが、言葉の表現世界は同じ語彙を使ってもその使い方、音声感情の乗せ方、アクセントの置き方、言葉の強弱、間、などで内容の伝わり方から、意味合い、濃淡も変わってくる。言葉は科学的分析に必要な定量化、定質化しての比較・検証が極めて難しいことをまず確認したい。その上でフレーズ、語彙の意味

方向、使用意図で実況・解説者の意識の方向が明らかになれば幸いである。とりあえず同じ項目で括り量的分析をすれば、傾向は読み取れると考え作業に入る。

作業の正確を期すために中継番組の全体の語彙を分析する方法もあろうが、膨大な量と語数になるので、どの種目も金メダル確定の瞬間を基準にその瞬間をどんな意識が言葉として発露されたかに絞ってみた。

各競技の特性、実況特性はいったん棚上げし概ねメダル確定瞬間の3分前からカウントを始めその後、切りの良い1分後位までの合わせて4分間を対象に文字に起こし、言葉やフレーズを項目ごとに集計した。

区分けする項目は実況で触れた内容から大雑把に括り「競技描写」「期待」「ワザ」「怪我・体力」「ポイント・勝負」「喜び・涙」「相手選手」「当該選手」「オリンピック」「チャンピオン」「金メダル」「日本・日の丸」「心理・精神力」「一般応援」「家族」「コーチ」「その他」の17項目とし類似の言葉もそれぞれ妥当と思われる項目に入れカウントした。(カウントに主観的な部分があるかも…)

表は言葉の分類から実況・解説者の意識の方向がどちらを向いているか表している。

際立った特徴は読み取れるか。オーソドックスな実況・解説者と「ある言葉」にこだわった実況・解説者を見つけた。

Ⅲ．結果・考察

1. 北京オリンピック実況の傾向読み取り

今回の9つの種目はソフトボールを除き試合が始まればデッド（流れの中断）が少ない競技がほとんどである。描写の中から競技の興味と優勝の喜びを表現したものも多かったが柔道男子66k級と柔道女子70k級は試合時間の短さ（一本で決めている事）もあったか…試合描写がほかの競技と比べて格段に少なかった。逆に用意した話題に満遍なくふれ、競技の勝敗のポイントより家族に言及した描写が目立った。

2. 実況の中で「家族」を多用

柔道男子66k級でおよそ4分間に9回、柔道女子70k級ではおよそ4分間に14回も家族の名前、話題にふれる部分があった。

また試合で予想以上に苦戦したレスリング女子63k級の伊調馨の決勝試合の際は姉妹で狙うメダルにかける思いが詰まった実況・解説が展開された。

分析表

北京オリンピック金メダルシーン実況フレーズ分析

オリンピック = 他の大会も 日本・日の丸 = 世界一世界新も
 チャンピオン = 2連覇も 心理精神力 = 頑張れも
 * 番外=競泳100平優勝 北島インタビュー

種目	選手	実況	競技描写						称賛	応援									
			競技実況	期待	ワザ	怪我・体力	ポイント・勝負	喜び・涙		相手選手	当該選手	オリンピック	チャンピオン	金メダル	日本・日の丸	心理精神	応援一般	家族	コーチ
柔道 66k	内柴	14	5	7	4	10	4	8	15	7	1	9	1	3		9	1	1	
競泳 100平	北島	19	11	8		2	*	16	27	1	3	2	2		1				
柔道女 63k	谷本	39	8	31		10	3	11	15	3	2	4	4	7		4	2	2	
柔道女 70k	上野	8	8	7	2	16	7	5	9	7	1	3		9	1	14		7	
競泳 200平	北島	49	10	4		3	2	6	24		7	4	5	2					
柔道 100k超	石井	37	28	21	2	10	1	4	13		1	9	3	2				4	
レスリング 55k	吉田	44	27	29	2	25	4	2	19	2	5	8	2	7		2	3	2	
レスリング 63k	伊調馨	57	20	14	12	5	1	4	13	5	6	9		4		6	3	1	
ソフトボール	日本	35	3	8		2	5	9	7	5		6	3	2				1	1

勝敗とともに家族を表現の中心に据える方向・実況・解説者の意識の流れは見えないか。

具体的にメダル獲得の瞬間前後の実況・解説内容を見ると…

メダルを獲得したのは選手であるのにもかか

わらず優勝が決まった瞬間、実況・解説者の視点は選手から家族に移っている。

思わぬ苦戦から家族（応援）に…と言うケースもあった。

柔道男子 66 k 級

実況 「さあ、これは背中を付いてしまったがポイントありません。そのまま押さえ込んだ内柴、いや、解けた。まだです。ここから押さえ込み…再び…あっとあっと言う間にタップ、参った。ダルベレ、参った。内柴正人、2大会連続の金メダル。スタンドの明かりに照らされ、光るメダルは金メダルです。オリンピック、内柴正人2連覇。腕が…どうでしょうか。かなり大きな怪我をしたのでしょうか。ダルベレ、まだ立ち上がることができません。ヒカル君との約束の金メダル、獲得です。」

解説 「首を押さえているようですね。」

実況 「敗れたダルベレです。ちょっと頭も打ちましたでしょうか。あー、ようやく笑顔に変わりました、内柴。北京オリンピック日本選手団、金メダル第1号。このメダルはアテネオリンピックに続いてオリンピック2連覇。笑顔からこぼれ落ちる 喜びの涙。アカリさんとヒカリ君に向けていま、ガッツポーズを見せました。お父さんは嘘つきじゃありません。君との 約束のために。見事復活、内柴正人。見事でしたね。」

解説 「はい」 実況 「あー奥様のアカリさんも涙です。あー、笑顔のヒカルくんも表情も垣間見えました

柔道女子 70 k 級

実況 「さあ、その女王、上野・・・小外刈り、一本！」

解説 「朽木だと思いますね。」

実況 「朽木ですか。手もかかっていたか？」

解説 「かかって、はい、力入ってたと思います。」

実況 「開始、46秒です。あっと言う間の一本勝ち。上野雅恵、完全復活。オリンピック2連覇達成です。1999年パーミナガム世界選手権で世界舞台デビューから10年目の今年、2008年北京オリンピックも金メダル。アテネに続いて女王復活。連覇になりました」

解説 「やっと笑顔見ましたね」

実況 「最後は笑顔です。このはにかんだような笑顔が、上野雅恵、戻ってきました。お父さんの姿です、そしてお母さんの姿もあります。柔道一家です。柔道場を経営しているノリミさん、そしてワカコさんの間に生まれて、5歳から英才教育、厳しい稽古の末にこの金メダルをつかみました。アテネの後、燃え尽き症候群と言ってしまえば簡単かもしれませんが、目標を失っていました。そして、三女のトモエさんも涙です。この姉の姿をしっかりと目に焼き付けて、自分も同じ階級ですからね」

解説 「そうですね」

実況 「跡を継いでいってほしいものです。笑顔、笑顔の上野雅恵。ようやく重圧から解放された上野の笑顔です

レスリング女子 63 k 級

実況「できました。ブルーです。有利なクリンチの状態から、相手のどちら足かを指定して、右か、左かを指定して、片足を取った状態から、有利な状態から 30 秒間の攻める時間を与えられます」

解説「さあ、ここは絶対ですね」

実況「ええ。さあ、行け、行け、さあ、倒した、背中を取った、押さえろ、押さえろ」

解説「あー、取りました。やりました、金メダルです」

実況「青出ました。金メダル。連続の金メダル。頂点を守った、4年間頂点を守り切りました。伊調姉妹の妹、伊調馨、2大会連続の金メダル」

解説「あー、本当に」

実況「全身の力を使い切りながら、もう余力はありません。姉も涙。姉は銀。妹は金。姉妹ともにこの北京のマットの上で、すべての力を出し切って、出し切ったの連続の金メダル」

解説「あー、苦しかったんでしょうね」

実況「ええ。アテネの時には、千春と一緒に取った金メダルですと言いました。もちろんそれと同じ思い。そして応援の声に応えるためにも、もう倒れそうでも戦いを続けなくてははいけない」

解説「そうですね」

一方で、家族に全く触れず描写で試合と選手を盛り上げた実況の例を参考に載せておこう。

競泳 100 メートル平泳ぎ

実況「北島抜けてきた、北島前に出た、北島前に出た」

解説「まだまだまだまだ」

実況「北島、前にはもう誰もいない、横にもいない…」

解説「ここからが勝負ですよ」

実況「…? (会場ノイズで聞き取れない) …もいない、北島、北島」

解説「いけ、いけ…」

実況「北島康介、先頭で、2大会連続で……(会場声援ピーク聞き取れない)」

解説「よっしゃ、やったー、やったー」(解説の興奮の声でほとんど聞き取れず)

解説「いや、上手い、上手いレース展開でしたよ、しかも世界新」

実況「世界新記録で金メダルに花を添えました」

解説「いや、やっぱりやってくれましたね。いや、完璧なレースやってくれました

実況「最後抜け出てきました。あとの7選手を置いていきました、北島康介。見事なレース」

解説「康介、おめでとう！いや、完璧なレースですよ」

家族の話題に触れ「涙」を誘う展開より、描写の世界に相手選手と当該選手のハラハラドキドキ感を作り出し、手に汗握るデッドヒート感を伝えている。さらには勝敗の行方に関する情報を提供する実況はスポーツ本来の面白さを伝える伝統的な実況とも言える。

二つの例からスポーツ実況には
①描写の中から面白さをつかみ取らせる手法、
②サイドの話題・情報を重視した実況・解説の2つのスタイルがあることを確認しておく。
今、ここではどちらが良くてどちらが悪いと言う結論は控えておく。

しかしこの違いは実況・制作者のスポーツに対する考え方、スポーツをどう捉えるかの相違の出発点であると思われる。スタイルの違いを言葉に直すと、スポーツの本質（競り合い・ぶつかり合いの醍醐味）から面白さを伝えるのか、スポーツを興味の対象・エンターテインメントとして面白さを全面に伝えようとするかの違いであろう。スポーツの本質にも関わる方向のズレが起きてくる。この違いが、社会の中でスポーツがどんな存在として受け止められ、多くの人がスポーツをどう受け入れるかを左右するものと思う。

また同時にそれは時代が醸し出す雰囲気、皆が享受しやすい安心感「心地よさ」意識を反映したものに他ならないとも思う。

3. 取材され表現される選手の内情

放送に入る前実況・解説者は当該競技の取材、選手取材を行う。その中で取材された情報は後にゲーム実況を行う際の重要な情報になっている。競技情報、相手に関する情報、故障情報など様々であるが、何度も顔を合わせるうちに素直に家族を含めて自己表現する選手もいる。反対に個人の情報は戦いの大事な部分として表に出さない選手もいる。最近では監督、コーチに制限されていた個人の情報を比較的自由に話しているように見える。

4. いつの時代から選手は自分を表に出して話し始めたか？

70数年前の「前畑」は嬉しさを固い表情で語った後、負ければ「生きて帰れない」と話したという。

「前畑頑張れ！」の時代意識は何処が何時ごろから変わってきたか。具体的に述べると国家から自分へそして家族への時代へは何時なのか。その後のオリンピックで何時ごろから選手は私の部分を表に出し始めたのか。

過去のオリンピック金メダリストが戦いの後に何を語ったか当時の報道からいくつかを見ておこう。（出展は日刊スポーツはじめ当時の新聞記事から）

「決勝はとにかく勝てばいいと思って慎重にやった。そして、大和魂を世界に示したかった。」

渡辺長武（当時23）1964年東京大会・男子レスリングフリースタイルフェザー級金メダル

「水を飲まなかったから、涙の出ようがないですよ」

桜井孝雄（当時23）1964年東京大会ボクシングバンタム級金メダル 日本五輪史上、唯一のボクシングの金メダル。

「演技してる間は夢中で何もわからなかった。鉄棒を終わってスタンドの声を聞き、ようやく逆転したのを知った」

加藤沢男（当時29）1976年モントリオール大会・男子体操団体金メダル。

「選手村に帰ったら女房に電話します」

園田 勇（当時29）1976年モントリオール大会・男子柔道中量級金メダル

今まで生きてきたなかで一番幸せ

岩崎恭子 当時14才 バルセロナオリンピック 女子200m平泳ぎ金メダリスト

初めて自分で自分をほめたいと思います

有森裕子 アトランタオリンピック マラソン3位・

「最後は気持ち強い人間が勝ちを取ることができるんだなって、つくづく実感しました」

上野由岐子（26）2008年北京大会ソフトボール日本代表のエース 金メダル

1964年の東京オリンピック当時は古い日本の意識をまだ残し、高度経済成長後のモントリオールでは表に出なくとも「自分の意志・家族への思い」が顔を出し始めている。

そしてバルセロナで14才の岩崎恭子が無邪気に人生を語り、アトランタで有森が自分の評価をして見せた。アスリートの低年齢化（精神的なものも含め）も影響しているか。そして北京。実況・解説者の意識には「家族」があったが、北島、上野のコメントには勝つこと・競技への思いが溢れている。コメント内容は時代と共に変化しているのは明らかである。

5. 実況者の状況と思い

実際の実況・解説者とアスリート関係はどうか。信頼関係の中で実況・解説者は選手と家族を取材し情報を得る。ただ実況の中で「家族情報」を使うか否かは別次元の問題である。

この場面で家族を表現することがスポーツ中継番組の面白さ、興味を引く事に繋がるのかの判断は中継担当者のスポーツに対する考え方だと思う。

一つはNHKのスポーツに対する考え方である。スタンスはスポーツを競技（勝敗へのアプローチ）として捉えて選手を描き大きな逸脱はない。NHKスポーツアナウンサー経験者は初期の教育の表れと言う。そのスポーツ実況教育の基本とは入局当初から、表現にあたっては「冷静」「平等」「忠実」を厳しく教えられ、地方大会から先輩アナウンサーのチェックを受け、それが評価とし中央に上がり、NHKスタイルの実力を認められたものだけが大きなイベントの実況を任せられると言う。

一方、民放はスポーツを「競技は楽しいイベントでもある（エンターテイメント）」との考えから、見てもらう・視聴率を得るためには視聴者の興味を引く様々な視点を提供し、時に競

技からの逸脱も大目に見て楽しさ、感動を求めている。中継イベントが大掛かりな場合、番組化にあたり「放送作家」を使い盛り上げを図ることもある。これまでも「連呼実況」「絶叫実況」など視聴者の関心を集めて実況することが視聴率につながり、大きなイベント中継に使ってもらえると言う図式が成り立っている。こうして作られたアナウンススタイルが本番の実況表現となって出るものと思う。その背景には時代の雰囲気もあろう。

スポーツ現場からは勝負に勝つためには技術も、精神力も、周囲のサポートも必要で、何故家族に焦点が当たってしまうのか、苦々しく思う発言も聞く。ここでもどちらが正当か結論を出すまでの論証をするつもりはない。しかしスポーツの根幹に関わる問題であることは確かであり場を変えて論じよう。

IV. まとめ

本稿では北京オリンピックのテレビ実況で家族への描写が多い事を取り上げ、その背景に時代の意識があるかを考察した。今回は「家族」の内容への言及・分析はしていない。その結果、実況・解説者は今の時代「意識・無意識」なのかは別にスポーツの世界に家族を持ち込むことがスポーツを楽しむことにつながると考えていると推察できる。

なぜ「家族」を今の時代の感動要素としたのか。伝える側は「興味を持って面白く見て欲しい」という立場。そして視聴者も家族に触れることを望んでいるであろうとの感触の中からコメントしている。もしそれが正しいならスポーツ実況の中で「家族」表現は**時代が望む方向、時代の意識**とも言える。

更に推論すれば頂点を目指すアスリートの孤独と時代の孤独感。トップアスリートの繋がりを求める心と孤独社会が求める家族の繋がりが同質で共感を得られるとの思いがあったかも知れない。

だがスポーツ現場やスポーツを科学する立場

としては単に時代が求める雰囲気だから実況・解説は面白ければよいと言った態度ではいけない。スポーツにおいて家族の存在は重要だが全てでない。「家族」が他に伝えるスポーツの要素より意味を持つなら、今後の研究で家族の支えと競技に及ぼす影響や競技中のアスリートの心の在り処（運動心理）と「家族」との関係を明らかにしたい。何らかの深層時代意識があるならスポーツの立場からも継続分析が必要である。テレビの影響力は未だに大きい。スポーツを理解しない視聴者がテレビによってリードされたスポーツの見方を強要されてしまう事もある。スポーツへの関心、理解がテレビの独断で作られた世界で無ければ良いとの懸念もある。

実況・解説コメントが作為的に「家族」を持ち出さずともアスリートの本当の心理が見えてくることがある。選手の沈黙が選手心理を感じさせ、その瞬間の選手の気持ちを十二分に伝えたインタビューを最後に掲げ稿を終えたい。

北京オリンピック競泳100平北島康介優勝後インタビュー

インタビュアー 「2大会連続、金メダリスト、北島康介選手です。強かったですねえ」
北島選手 「はい… …ありがとうございます。」
インタビュアー 「アテネとはまた違ったうれしさがこみ上げてきていると思いますが」
北島選手 「はい、うれしいです……すいません……何も言えねえ…」
～ タオルを顔に当て 一沈黙一 必至に涙こらえる ～
インタビュアー 「やっと落ち着いてきましたか、少しは…」
北島選手 「はい…ほんとに応援してくれるみんな…方がたくさんいたので、ほんとに金メダルとれてよかったす。」
インタビュアー 「アテネの時には超気持ちいいという風に気持ちを表現しましたけれども、この北京の金メダルはどんな気持ちなんですか？」
北島選手 「もう…アテネの時以上に気持ちいいです。超気持ちいいです、ほんとに。」
インタビュアー 「しかも」
北島選手 「最高ですね」
インタビュアー 「しかも、世界新記録での金メダルになりました」
北島選手 「はい、もう、記録も優勝もできたので、ほんとに満足です、はい。本当にありがとうございます。」
インタビュアー 「これで一気に日本に勢いが付きましたよ、北島さんのおかげで」
北島選手 「そうですね、あの、まあ、日本チームもこれからもっと頑張ってくれると思うので、僕もまだ 200
があるので頑張りたいです」
インタビュアー 「最後にもう一度聞きます。どんな気持ちですか？」
北島選手 「超気持ちいいです。はい」
インタビュアー 「ありがとうございました」
北島選手 「はい」

インタビュアーが「超気持ちいい」を言わせ
たのは頂けないが、沈黙に質問を追い打ちせず
(我慢)、一呼吸を置いたあとの北島の答え方が
何とも心地よい。作為をせずともアスリートの
心理・気持をストレートに伝えることが可能と
いうコメントである。

参考資料

1. 2008 北京オリンピック各社テレビ中継放送コメント
(中継番組より文字起こし)
2. 1936 ベルリンオリンピック女子 200 メートル平泳
ぎ実況コメント
(日本放送協会編「放送」昭和 11 年 9 月号、第 6 卷・
第 9 号)
3. 2008 北京オリンピック J C 参加スタッフ活動実態
聞き取り
(スタッフ数、ユニカメラ台数)
4. 過去オリンピック選手コメント 日刊スポーツは
じめ当時の新聞報道より